



大妻多摩中学校

二〇一八(平成30)年度

## 入学試験問題(第一回)

### 【国語】

時間 50分

2月1日(木)

#### 【注意事項】

- 1 問題は16ページまであります。
- 2 指示があるまで、この冊子を開いてはいけません。
- 3 答えはすべて、問題の指示に従って解答用紙に記入してください。
- 4 句読点やカギカッコは一字と数えてください。
- 5 ページが抜けていたり、印刷が見えにくい場合には、手をあげて知らせてください。

一

次の山中伸弥教授と永田和宏教授との対談を読んで、あとの問いに答えなさい。なお、問題文には一部省略した箇所があります。字数制限のある問題は、句読点やカギカッコも一字と数えること。

**永田** 日本のiPS細胞研究所でもアメリカでも、山中さんが「このテーマでやれ」と提案することはありますか。

**山中** いえ、基本的には自分の好きなことを選ぶように言っています。

**永田** うちの<sup>注1</sup>ラボでも、私からは基本的に言わないようにしています。それで、うちの学生がどこかに書いていたおもしろい話があつたんです。ミーティングでデータを出して話していたとき、「ボス——私のことらしいのですが(笑)——が、『これ、おもしろいんちやうか』と言うと、だいたいそれが次のテーマになっていく」と。そう言われるまで気がつきませんでした。でも、どうも先生にも私にも「おもしろい」と思えることが、研究室のテーマになっていくみたいで、<sup>①</sup>これは結構いいなと自分では思っています。

それほど高い給料をもらっているわけではなく(笑)、それでもわれわれが研究者を続けているのは、お互いがおもしろいと思える現象に、お互いが関与しながらディスカッションができるからではないか。これが、私たちが研究という場に<sup>つな</sup>繋ぎ止めている理由じゃないかと思うんです。山中さんの場合は、研究所長になられると、そういう場がどんどん減ってきて<sup>注2</sup>フラストレーションが溜<sup>た</sup>まつたりしませんか。

**山中** その意味でも、アメリカに持っている研究室は、純粋な研究者に戻れる場所という気がします。英語はいまだに苦労していて、今朝もアメリカとの電話会議だったんですが、もつといろいろ言いたいの、なんか<sup>②</sup>ついつい“Thank you”<sup>サンキユー</sup>って終わってしまつて悔しいです(笑)。

**永田** 山中さんにとって、アメリカ体験はとても大きいと思うのですが、当時をふりかえってみてどうですか？

**山中** 二人の子どもがまだ小さいときに一緒に行ったのですが、一番違いがあつたのは、子どもの教育ですね。上の子は日本で幼児教室みたいなどころに通つてからアメリカに行ったんですが、やり方が全然違うんです。日本にいるときは、お絵描きするにして

も、テーマが決まっっていて、それをどうしたらうまく描けるかということをお教してもらって、「ああ、上手にできましたね」という感じでした。ところが、アメリカに行くと、いきなり真っ白なキャンバスとクレヨンだけ渡されて、「はい、どうぞ」と。何を描けとも言われなくて、好きなものを好きに描きなさいという。だから子どもは、最初すごく戸惑って、どうしていいかわからなくなってしまうんです。でも、しばらくしたらどんどん絵を描きだして、今では絵が大好きです。どちらがいいかはわかりませんが、本当に違うなと感じましたね。

A

**永田** うちはアメリカに行ったときは、子どもが三年生と五年生で、英語教育もまったくしていきませんでした。その中で

③

しながらなんとかやっていたわけですが、一番強く感じたのは、家族の一体感でした。

B

**山中** 日本にいる間は、昼間は実験、夜や土曜は生活費を稼ぐためもあって、手術の手伝いなどで病院に行っていました。昼もいない、土曜も夜もないから、子どもに会う機会がぜんぜんなくて、子どもあまり僕になついていなかったんです(笑)。アメリカではもちろん研究を一生懸命やりましたが、家族四人の時間も持てたと思います。娘たちともよく話ができて、あの三年がなかったら、娘は口きいてくれなかったと思います(笑)。

C

**永田** アメリカでは夏休みに子どもたちをサマーキャンプに送ることが多いですね。わが家の場合は、長男が小学校六年生、長女が四年生のときに、別々のキャンプ地に放り込んだんです。英語もほとんどできないのにね。二日かけて、それぞれのキャンプに子どもを届けて帰るとき、車の中で不意に気づいたのは、「ここで交通事故を起こしてわれわれが死んだら、誰も子供たちの居場所を知らない」ということ。

D

**永田** 今、若い人たちが、昔のように外国に出て研究したいと思わなくなっていると言われます。たしかに留学しなくても、研究は日本で十分やっつけていける。でもやはり、僕はどんどん世界に出た方がいいと思っていますけど、それについてはどうですか。

**山中** ⑤ 僕は海外にはぜひ出ていくべきだと思います。特に若いうちに、学生時代に行けたら最高です。三十歳で行くのと二十歳で行くのは、<sup>注3</sup>雲泥の差です。もう一回学生時代に戻れたら、柔道をやめてラグビーをやるまでのあの一年だけでも、アメリカに行

きたかったと思います。

今、インターネットなどによって世界の距離は近くなっていると言われます。でも、実際に行くのとはまったく違う。僕が毎月アメリカに行く理由の一つはそれなんです。今はもう、電話会議やスカイプ等のビデオ会議で相手が目の前にいるかのよう話すことができます。でも、それではやはり教えてくれないこと、わからないことがいっぱいあるんですね。実際に飛行機に乗って、現地に行つて、ワインでも飲みながら夕食を一緒にとつたら、いろんな情報が入ってくる。だから月に一度、わずか数日ですけれども、アメリカの研究の中心に行くことによって、日本にいる残りの時間よりも、はるかに情報が入ってきます。ですからそういう意味でも、世界を知ってほしい。

**永田** 日本にいて、世界を過大評価しちゃうところがあります。⑥ 世界を知る、あるいはもっと単純に「知る」ということには二

面性があつて、一つはこれまで自分が知らなかったことを知ることです。例えば、「こんなにすごい人がいるんだ」ということを、知ることですが、もう一つは、「なんだ、自分と同じじゃないか」ということを、発見することでもありますよね。論文だけ読んでみると、外国のすごい研究室で、雲の上の世界のように思っている、実際にそこに行つて彼らとディスカッションしていると、なんだ、自分たちと同じことを考えているんだな、と実感できるわけです。同じように若い人たちも、山中さんのことを「雲の上の、自分たちとはぜんぜん違う人なんだ」と感じていると思います。でも、そう思っていたら、自分なりの「最初の一步」が踏み出せないんじゃないか。山中伸弥も、最初から今の山中伸弥であつたわけではないのです。

(山中伸弥×永田和宏「環境を変える、自分が変わる」『僕たちが何者でもなかった頃の話をしよう』(文春新書)

注1 ラボ……研究所。研究室。実験室。

注2 フラストレーション……欲求不満。

注3 雲泥の差……(天と地ほどの)非常に大きな差。

**問1** ——線部①「これは結構いいな」とありますが、「これ」が指し示す内容を、本文中から「こと。」につながるように、三十四字で抜き出して、その最初と最後の五字を答えなさい。

**問2** ——線部②「つつい「Thank you」って終わってしまったて悔しいです」とありますが、それはなぜですか。その理由を本文中の語句を用いて三十字以内で答えなさい。

**問3** 本文には、次の一文が抜けています。この一文を入れるのに最も適切な箇所を、本文中の     の中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ああ、家族って、こんな小さな単位なんだなあと思いましたね。

**問4**  に入る四字熟語として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 右往左往      イ 縦横無尽      ウ 日進月歩      エ 以心伝心

**問5**

——線部④「娘は口きいてくれなかったと思います」とありますが、それはなぜですか。その理由として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

**ア** 反抗期の娘は、父親と人生について話すことなど絶対にしたくないと考えていただろうと思うから。

**イ** 小さい頃から昼も夜も仕事で家にいないので、娘がまったくなついてくれないまま大きくなってしまっていただろうと思うから。

**ウ** 昼も夜もいつでも一緒にそばにいて家族の時間を十分に持てたので、もう特別話をする必要がないと娘が考えただろうと思うから。

**エ** 小さい頃から仕事が忙しくてそばにいらなかったので、自分が父親だということを認識しないまま娘が大きくなってしまっただろうと思うから。

**問6**

——線部⑤「僕は海外にはぜひ出ていくべきだと思います」とありますが、それはなぜですか。その理由として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

**ア** 実際に海外に行くと、日本のような小さな国ではできない多くの不思議な経験をするができるから。

**イ** 実際に海外に行くと、英語がうまく話せなくても、身振り手振りで充分言いたいことを伝えることができるから。

**ウ** 実際に海外に行くと、現地の人々は親切なので、おいしいものを食べさせてくれたり楽しい経験をさせてくれたりするから。

**エ** 実際に海外に行くと、ネットなどでは分からないことが分かったり、日本にいるよりも多くの情報を手に入れたりすることができるから。

**問7** —線部⑥「世界を知る、あるいはもっと単純に『知る』ということには二面性があって、一つはこれまで自分が知らなかったことを知ることです」とありますが、では、もう一つはどのようなことですか。本文中の語句を用いて、具体的に三十五字以内で答えなさい。

**問8** **問7**の答のようなことを「知る」ことが大切であるのはなぜだと考えられますか。その理由を、七十字以内で書きなさい。

**問9** 山中伸弥教授は、ノーベル生理学・医学賞を受賞しています。では、ノーベル文学賞を受賞した作家を、次の**ア**～**エ**の中から一人、また、その作家の作品を**オ**～**ク**の中から一つ選び、それぞれその記号を答えなさい。

**ア** 川端康成

**イ** 村上春樹

**ウ** 夏目漱石

**エ** 宮沢賢治

**オ** 『銀河鉄道の夜』

**カ** 『伊豆の踊子』

**キ** 『ノルウェイの森』

**ク** 『我が輩は猫である』

二

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。なお、本文中の表記は原文のままにしております。字数制限のある問題は、句読点やカギカッコも一字と数えること。

渡ろうとした信号が赤になってしまったたり、あと少しで乗れそうだったバスが発車してしまったり、と何かにつけてついていけないナツミ。両親の不仲が原因で勉強にも身が入らず、今日の期末試験も全くできなかった。そんなついていけない自分の人生について思いを巡らせていると小学校の時に仲が良かったマキちゃんとバス停で出会う。別々の学校を受験した二人ではあったが、マキちゃんは合格し、ナツミは不合格だった。そしてそのことが原因で仲良かった二人はすっかり疎遠そとんになってしまったのだった。二人はバスの中で久しぶりに話をするが、ひよんなことからお互いに不幸の手紙が送られてきたことを知る。不幸の手紙に困惑している二人に一人のおばあさんが話しかけてきた。

「あなたたち、どうするつもり」

何を言われているかわからず、ナツミはマキちゃんと顔を見合わせた。

「不幸の手紙よ」

「どうやら、おばあさんはこちらの話を聞いていたらしい。」

「<sup>①</sup>出さない」

二人が黙っていると、おばあさんは繰り返した。

「出した方がいいわよ」

「でも……」

ナツミが言いかけると、異様に低い声でおばあさんが言った。

「出さないとあとで後悔するようないことが起きるわよ」

すると、その横に座っていたおじいさんがおばあさんに向かって小さな声で言った。

「やめなさい」



「あなたは黙ってて！」

おばあさんが鋭い声ではねつけた。その声は静かなバスの中でことさら大きく響いた。ナツミには乗客の全員がこちらに意識を向けたのがわかった。

「もしかしたら何も起きないかもしれない。でも、万一起きたとき、後悔するわよ。出しておけばよかったって」

おばあさんは低い声で言い、ナツミはマキちゃんとまた顔を見合わせた。

「そんなこと、起きますか」

マキちゃんがいくらか体を斜めうしろに向けながら言った。

「子供を亡なくした人がいるわ」

おばあさんがまったく抑揚よくようのない調子で言った。

「手紙を出さなかったからよ」

二人が黙っていると、おばあさんはひとりごとのようにつぶやき出した。

「ああ……出せばよかった……出していれば……あんなことは起こらなかったのに……言うことを聞いたばかりに……あなたは……わたしひとりでもできなかったのに……」

おじいさんがもういちどおばあさんに言った。

「やめなさい」

すると、おばあさんは急に気がついたような声の調子で訊きき返した。

「何がですか？」

「もういいから」

「どうしてですか？」

「もういいから、やめなさい」

おじいさんの声に厳しい響きがこもったように聞こえた。おばあさんは、さつきとは違って、脅えたような声を出した。「わたしは……ただこのお嬢さんたちに注意をしてあげているだけなのに……」

そして、それきり黙り込んでしまった。

バスの乗客が耳をそばだてているのがわかった。<sup>②</sup> ナツミはマキちゃんとしやべるのをやめて、窓の外を見た。マキちゃんはカバンから携帯電話を取り出してメールをチェックしはじめた。

やがてうしろの席でおじいさんが手を伸ばして降車用のブザーを押す気配があり、バスが次の停留所で停まると立ち上がった。おばあさんは、ナツミたちの席の横を通るとき、立ち止まって声を掛けた。

「出すのよ」

二人は黙って軽く頭を下げた。

バスが発車すると、マキちゃんが小さな声で訊ねてきた。

「手紙、いつ来たの？」

「えーと、三日前」

「うちも三日前」

本当だろうか。もしそうだとしたらマキちゃんが出したのではないということになる。

「もう、時間がないよね」

マキちゃんが<sup>③</sup>憂鬱そうに言った。

「まあね」

「まあねって、明後日までに出さなくちゃいけないんじゃない」

「どうして」

「あれって、五日以内に出さないといけないでしょ」

「五日以内？」

「五日以内に出さないと不幸になるって書いてあったでしょ」

「五日以内なんて書いてなかった」

「うそ」

「ほんと」

「じゃあ、なんて？」

「一週間以内に出せって」

「五日以内に三人に出せ、でしょ？」

「違うよ、一週間以内に五人に出すの」

そう言ったとき、ナツミはすごく重要なことに気がついた。

「そうか、別の種類の不幸の手紙なんだ」

マキちゃんも弾はずんだ声で言った。

「違う人から届いたんだ」

だとすれば自分のところに届いた不幸の手紙はマキちゃんが出したのではないということになる。マキちゃんの声が弾はずんでいるのも、わたしが出したのではないとわかったからかもしれない。わたしが疑っていたのだからマキちゃんが④そう思っていたとしても不思議ではない。

「いいなあ」

マキちゃんが羨うらやましそうに言った。

「何が」

「そっちは、一週間に五人でしょ、こっちは、五日に三人だからたいへんだよ」

「どっちも、よくないよ」

そう言いながら、ナツミは思っていた。出さなかったら本当に不幸が訪れるのだろうか。うしろに座っていたかわいそうなおば

あさんのように。

でも、たぶんそうじゃない。あのおばあさんが不幸の手紙を出さなかったから子供が死んだんじゃない。出しても出さなくても死んだに違いない。かわいそうだけど、その子はそういう運命だったのだ。

おばあさんがかわいそうなのは子供が死んでしまったからではない。もちろん子供に死なれるというのはとてもつらい経験だろう。

でも、人が生きていく中で、大切な誰かを失うということは絶対にありえないことではないはずだ。おばあさんが本当にかわいそうなのは、子供が死んだのは自分が不幸の手紙を出さなかったからだと思っっていることだ。そうやって、いつまでも自分を責めていることだ。誰が出したか知らないけれど、その人はどれほどひどいことをしたかわかっているのだろうか。

もしわたしが五人に出すとすれば、その人たちをあのおばあさんと同じような悲しい目にあわせてしまうことになるかもしれない。

やめよう、とナツミは思った。わたしは出すのをやめよう。たとえ、お父さんとお母さんが離婚するようなことになっても、期末試験の結果が絶望的なものになっても、それ以外に思いもよらないような不幸に見舞われても、それを不幸の手紙のせいにするのはよそう。不幸の手紙を出さなかったからだなんて決して思わない。それはそうなる理由があっただけなのだ……。

気がつくと、次はナツミが降りる停留所だった。慌てて窓の横についている降車用のブザーを押した。マキちゃんはその次の停留所で降りるはずだった。

バスが停まると、通路側に座っているマキちゃんが席を立ててくれた。ナツミが出やすいようにしてくれたのだろうと思っっていると、小さな声で言った。

「わたしも降りる」

どうしてかナツミには理由がわからなかった。

開いた降車用のドアからまずマキちゃんが降り、続いてナツミが降りた。

マキちゃんは降りたところに立ち止まり、バスが発車していくと、⑥ とした口調で言った。

「わたし、出さない」

それを聞いてナツミは嬉しくなった。そして、マキちゃんと同じように⑦ と言った。

「わたしも、出さない」

二人は顔を見合わせると、少し照れたように笑い合った。

「じゃあね」

マキちゃんはそう言って、次の停留所の方に向かって歩きはじめた。

「じゃあね」

ナツミもそう言って、反対の方向に歩き出した。

⑧ 歩きながら、ナツミは自分の気持が明るくなっていくのがわかった。そして、こう思った。わたしたちは背中を向けて反対方向に歩いているけれど、小学生のとき一緒に神社に行ったときのように手をつないで歩いているような気がする。ナツミにはなんとなくそのときのマキちゃんの手のひらの感触が思い出せそうな気がした。

マキちゃん、大丈夫。不幸なんて、きつと来ないから。ナツミは心の中でつぶやいた。

バス通りを渡るため横断歩道の信号が変わるのを待っていると、向こう側の歩道の脇わきに郵便ポストが立っているのが見えた。

カバンを左手に持ち替えたナツミは、右手でピストルのかたちを作った。そして、⑨ 人差し指の銃口じゆうぐちを赤いポストに向けると、狙ねらいを定めて声の銃弾じゆうだんを発射した。

「ダーン！」

(沢木耕太郎「銃を撃つ」『あなたがいる場所』(新潮文庫))

**問1** — 線部①『出しなさい』二人が黙っていると、おばあさんは繰り返した。『出した方がいいわよ』とありますが、このよう

にナツミとマキにおばあさんが繰り返し忠告するのはなぜですか。その理由を説明している次の文の [ ] にあてはまるように、本文中の語句を用いて三十字以内で答えなさい。

[ ] とナツミやマキが後悔することになると、おばあさんが考えたから。

**問2** — 線部②「ナツミはマキちゃんとしやべるのをやめて、窓の外を見た。マキちゃんはカバンから携帯電話を取り出してメー

ルをチェックしはじめた」とありますが、二人がこのような態度を取ったのはどのような気持ちからですか。その説明として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

**ア** おばあさんのやり取りをバスの乗客が注目していることに気がつき、これ以上おばあさんとは関わりたくないという気持ち。

**イ** おばあさんの不吉な予言が現実になることに恐れおののき、おばあさんに素直に従うことを態度によって示そうとする気持ち。

**ウ** おばあさんの不思議な忠告を拒み、おばあさんに惑わされずに自分たちの信念を貫き通すことをさりげなく示そうとする気持ち。

**エ** おばあさんとのこれまでのやり取りから不信感を抱き、おばあさんを見捨てることによってその気持ちを表現しようとする気持ち。

**問3** — 線部③「憂鬱そうに」とありますが、「憂鬱だ」と言う意味を持つ慣用句を、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

**ア** 胸が裂ける

**イ** 胸がすく

**ウ** 胸がふさがる

**エ** 胸が騒ぐ

問4 — 線部④「そう」が指し示す内容を、三十字以内で答えなさい。

問5 — 線部⑤「うしろに座っていたかわいそうなおばあさんのように」とありますが、ナツミは、なぜこのおばあさんがかわいそうだと思っているのですか。その理由を、本文中の語句を用いて六十字以内で答えなさい。

問6 ⑥・⑦ には同じ言葉が入ります。その言葉として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア うっかり      イ きっぱり      ウ さっぱり      エ ゆっくり

問7 — 線部⑧「歩きながら、ナツミは自分の気持ちが明るくなっていくのがわかった」とありますが、それはなぜですか。その理由として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 不幸の手紙を出したことによって誰かに不幸が降りかかることがあったら、一生自分自身を責め続け、結局自分自身が不幸になってしまうことをマキと二人で一緒にいたからこそ理解することができたとナツミは思ったから。

イ すべての人間に不幸は訪れるが、その不幸を感じないように強く生きることこそが人間にとって一番大切なことである、という生きる上での大切なメッセージをマキからもらえたとナツミは実感することができたから。

ウ 他人の言葉によって思っていたような行動を取れずに不幸になってしまったことが人生にはあると知り、人がどう言おうと自分が本当にやりたいことを実行していくことが大切だということをマキの態度を通してナツミは学ぶことができたから。

エ 軽い気持ちから不幸の手紙を出すことで人を生涯にわたり苦しめることがあることを知り、そのような軽はずみなことをしてはいけないという気持ちを、マキと分かち合い、これまでマキに対して感じていたわだかまりが溶けたようにナツミは感じました。

**問8**

——線部⑨「人差し指の銃口を赤いポストに向けると、狙いを定めて声の銃弾を発射した」とありますが、ナツミのこのような振る舞いにはどのような気持ちが入められていますか。その説明として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

**ア** 不幸の手紙をきっかけに人間の幸せというものについて改めて考えさせられた。しばらくぶりに会った友達と心が通じ合えた幸せを心から喜ぼう、という気持ち。

**イ** 不幸の手紙によってこれから先自分に不幸がもたらされることがあるかも知れない。しかし、生きている限りは必ず人間に不幸は訪れるのであるから、不幸に怯えずに幸せな時を十分に楽しもう、という気持ち。

**ウ** 不幸はすべての人に平等に訪れるものだから、不幸の手紙を受け取ったから不幸になったと言う考えは捨てた方が良い。不幸の手紙などという下らないいたずらをこの世からなくすためにこれから行動していこう、という気持ち。

**エ** 不幸なことが自分の身に起こったとしても、それは不幸の手紙を出さなかったからではなく、そうなる理由があったただけだ。たとえ自分の身にこれから先不幸なことが起きたとしても、それに打ち克ち、乗り越えていこう、という気持ち。

**問9**

本文の内容として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

**ア** 不幸の手紙によって明らかになった一人の女子生徒の苦しみが、老夫婦との不思議なやり取りを通して淡々と描かれている。

**イ** 人生の不幸と幸福について考えをめぐらす主人公の若さゆえの迷いが、その友達や老夫婦との心温まる交流を通して伸び伸びと描かれている。

**ウ** 何をやってもうまくいかない主人公が、不思議なおばあさんとの交流によって勇気を得て、これまでとは全く違った人生を歩もうとする決意が力強く描かれている。

**エ** おばあさんと友人との不幸の手紙をめぐるやり取りをきっかけに、どんなトラブルに見舞われたとしても、前を向いて生きようとする主人公の内面が生き生きと描かれている。



**三** 次の各問いに答えなさい。

問1 次の各文の——線部のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

- ① 南極**カンソク**船が日本に帰ってきた。
- ② 甲子園ではみんなが大声で**オウエン**をした。
- ③ 交通事故が**ゾクハツ**しているので注意する。
- ④ 教室の机の列を**トトノ**えた。
- ⑤ 優勝がかかっている試合を見て**コウフン**した。

問2 次の①～⑤の意味にあたる四字熟語を、後のア～オの中から一つずつ選び、また、□にあてはまる漢字をそれぞれ答えなさい。

- ① 悠々自適な生活のこと。
- ② やましいことのない状態。
- ③ 一生のうち一度限りであること。
- ④ どんな事態になっても柔軟に対応すること。
- ⑤ 人の意見や批判など気にとめずにあっさり聞き流してしまうこと。

- ア 一  一会      イ 青天  日      ウ 晴  雨 読
- エ 馬耳東       オ 臨機応

以下余白





